

扉はもう一度あく

大河内 葵



大それた夢

多分誰だって一回くらいは夢見たことがあるんじゃないだろうか。

小さい頃に見た漫画やアニメの主人公みたいに

ある日突然世界の運命を担わされてしまったり

ある日突然新しい世界で目覚めてしまったり

ある日突然魔法が飛べてしまったり

ある日突然見たこともないお城で目が覚めてしまったり

ある日突然ものすごい美貌に恵まれてしまうような

そんな「ありえない」自分を。

でも毎朝目覚めて気づいてしまう。

ああ、やっぱり私は私でしかないのだな、と。

だから大人になるにつれて皆言わなくなってしまう。

そんな大それた夢を実は未だに抱えていることを。

叶えない夢

「というわけで、来週から三者面談やるからなー。ちゃんと親と話し合っておけよ。三者面談で親子バトルとかほんと勘弁だからな。俺は責任とらないぞー。」

「そんな生徒いるんですか（笑）？」

「いや、俺がはじめて担任持った年について本当に大変だったんだぞ！次の親御さんを待たせるし、隣のクラスの先生も出てくるし、最後は校長室に移動になってな……まあ長くなるから、やめとくか。よし、号令。」

今日もいつも通りに学校は終わり、皆が散り散りに帰っていく。

「あずさ、今日あいてる？」

「うん。お茶してかえろ！」

「よかったー。てか、渡辺まじでウケるんだけど。」

「いや、でも渡辺センセだったらなんか親子バトルを止められなくてハラハラしてるの想像出来る。」

「確かに！」

そしていつも通り美帆と一緒にちょっとだけ寄り道してから帰っていく。

たまに美帆の降りる駅の駅ナカにあるカフェでお茶をして、恋バナだったり、今日あったことをひたすら喋ってから帰る。

「でも三者面談かぁ。無理して受験する訳じゃないから進路でそんなに言われたいとは思ってけど、やっぱりちょっと緊張するなぁ。」

「美帆は付属大志望で変わらず？」

「うん。理系科目ムリだし、文学部とかでまったり行こうかなって思ってる。」

「でも美帆は英語できるし、向いてるんじゃない？」

美帆は付属大に進んで、T大と一緒にインカレサークルで彼氏を作るのが夢だと言っていて、受験せず内部進学を希望している。

そんな美帆の話を知るときに、なんだか女の子だなぁと感じてしまう。

「あずさは本当に大学いいの？」

「うん。」

「……そっか。あずさ、ホントに勉強も出来るしなんだかもったいないような気がしちゃうんだよね。おせっかいなのはわかってるけどさ。」

「まあいいんだよ、これで。」

そう、私は大学へ行かないという選択肢を取った。

行きたい気持ちが無いわけではない。

ただ、今大学へ行くという選択を出来るだけの度胸がなかった、とも言える。

「なんかあずさの言い方を聞くとさ、ちょっと未練があるように聞こえちゃうんだよね。」

「まあ当たらずとも遠からず。未練はあるんだと思うけどね。」

「奨学金とかだってあるし、あずさなら特待生とか余裕だと思うんだけど……」

「さすがに特待生は恐れ多い話だけど……やっぱりさ、とりあえず働いてからかな、と思ってしまいうんだよね。」

高校まではやっぱりちゃんと行きたい。

でもその後は働きたい。

自分もなんとかするから大学へ行ってもいいんだよ。

そう言う母親を振り切ってやっとこの夏休みに将来を決めた。

離婚して一人になった母親を支えるのは自分だ。

離婚が本決まりになったこの夏に、ひとり心の中で誓った。

別に高校生の自分が母親をなんとか支えられる収入を得られるとは微塵も思わない。

でも、やっぱりだいたい元気のない母親をちゃんと見守ってあげられる時間は欲しいし、大学費用捻出のために酷使させるようなことはしたくない。

本当は、本当のことを言うと。

美帆みたいに大学でインカレサークルでワイワイと合宿に行ってもみたい。

好きな数学をとことん極めてみたい。

一日中油絵を描き続けたいし、自分の身長を超えるような彫刻を一度やってみたい。

イギリスに留学して演劇の歴史を学びたい。

挙げたらキリがない。

でもキリがないから、どれも叶えない。

今は夢見るのではなくて、起きて現実を見る時だから。

美帆のインカレサークルに入った後を夢見る話を聞きながら、私はそっとコーヒーと一緒に羨ましい気持ちを飲み込んだ。

適わない夢

「はい、それでは撮影終了です。宮崎さんありがとうございましたー！」

私は拍手を浴びながら、スポットライトからそっと抜け出す。
時間は午前2時、これが10月号として世の中に出るのはだいぶ先。

新しい服を着てわくわくした体験も、しばらくは自分一人の胸の中だ。

「あず、お疲れ様！」

「おつかれー。さすがに眠くてへロへロ。」

「タクシーシェアろう。」

「それで行こう。ほんとマンション近くてよかったー。」

モデル仲間の結子はちょうど私の家から徒歩5分の事務所の借り上げマンションに住んでいる。
。売り出しの時期も同じで、もっている雰囲気系の系統も似ているため、しょっちゅう現場で一緒になる。

「結子のピアス、かわいいー！」

「Cの新作だよ。この前の展示会で予約しちゃって。」

「お目が高いなあ（笑）」

仕事上ではライバルに近いが、結子はサバサバとしているためオフでも付き合える数少ない仕事で知り合った友人だ。

「N坂までお願いします。」

高校を卒業してから、結局うまく就職は決まらず、飲食店でアルバイトをしていた私に突然舞い込んだ夢のような話。
夢ではなくて現実を見る。

そう自分に言い聞かせてきたし、引っかかるもんかと意地をはっていたが、どうやらこれは現実らしいと認識し、今に至る。

アルバイト中にスカウトなんて本当にドラマやテレビで聞く話だと思っていたが、まさか自分がその主人公になるとは誰も思わない。

でも、*現実*に起こっちゃったんだよね。

飲食店でのバイトの稼ぎに限界を感じていた私は、働く時間の不規則さなど全てに目をつむり、この世界に飛び込んだ。

幸いなことに売れっ子ではないので、母親を見守れる程度には家に居られている。事務所からはもっとオーディションとか出てみればいいのにと惜しがられる。

「結子は明日も撮影？」

「んー。明後日からニューヨーク行くからその準備かな。」

「ニューヨーク！……そっか、ついにか。」

私とは打って変わって意識高く自分を磨き続ける結子は、長年の夢だったコレクションへ参加するらしい。

確かにモダンな雰囲気のある結子ならニューヨークコレクションはとっかかりとしてかなりいい気がする。

「うちの社長がさ、あずさも海外ウケ絶対いいから一度行ってみたらいいのにつてさ。」

「そんなの結子の方が抜群にいいって。」

「あず、絶対もっと光るのに。今でさえそれだけ目引くのにさあ。」

結子ははっきりと物を言う分、褒めてくれると本当のことだと思えるからすごく心地良い。

それでも、高校を出たら母親を支えると決めておきながら、ほっぽり出して海外へというのはやはり気が引ける。

「実はさ、ニューヨークいきのチケット2枚なんだ。」

「マネさん……もしや彼氏連れてくの？」

「いやさ。あずさ、来てくれない？準備とかもあるだろうし、明日の昼までに決断してね。」

「はい！！??」

「あずをなんとかオーディションの場に引き出すにはって考えてたけど、強制的につれてくのが一番だって話を社長と話しててね。」

策士だ。

「んじゃよろしく！メール待ってるね♡」

結子は颯爽と代金の半分を置いてタクシーを降り、マンションへと入っていった。

「ただいま！」

「おかえりー。」

二人暮らしをはじめてから、どんなに寝てていいと言っても母親は私が帰宅する時かならず起きてきてくれる。

それが娘に迷惑をかけてる母親としての責任よ。

そう言って母親は笑うが、やはり少し申し訳ない気がしてならない。

「ちゃんと結子ちゃんにメールしなさいよ。」

「……へっ！？なんでお母さんまで筒抜け??」

「社長さんから直々に手紙と電話来たら、そりゃあ筒抜けよー。むしろ水臭いじゃない、今まで海外に挑戦するの相談してくれないなんて。」

「いや、だって私は日々暮らせる分稼げたらいいとしか思ってないし。」

「それなりに興味もってるから、最近英語をもう一回はじめたり、歩き方のレッスン受け直したりコソコソやってたんでしょ（笑）あんた丸分かりよ。」

「でもそれはいつかは役に立つからって思って始めただけであって……」

「どうせ私をおいてくのが心配とかでしょ？気にしない気にしない。若いうちに海外挑戦しなかったらタイミング逃すわよ。」

「もう。皆してお見通しなんだから。」

「あんたがわかりやすいのよー。」

そう言って母はコロコロと笑うと先に寝室へと向かっていった。

稼げればいい。

そういう気持ちで始めたものの、やはりどんな事にも上はあるし、始めたからには上を目指したい。

持ち前の負けん気が影響して、半年ほど前からこっそり自分磨きを始めていたが、自分の環境を考えたらずれは適わない夢だと思っていた。

それなのに、こんなに早くバレるというよりチャンスが来るなんて。

『結子。昨日はありがと。NYコレクション、私もチャレンジする。』

朝になったら、結子にそうメールしよう。

逸れた夢

「あず、帰国おめでとー！！！」

「ついでに誕生日おめでとー！！！」

華やかにクラッカーが鳴り、目の前にロウソクを差したケーキが運ばれてくる。

「やめてー。なんか恥ずかしいー。」

「ほらほら、早くロウソク消しなって！」

長期出張が重なり半年ぶりの帰国となった今回は、ちょうど昨日が誕生日だったことから友人一同でパーティーを開いてくれた。

未だにいまいちパーティー慣れしていない私にとってはこそばゆかったが、やはり久々に友達に囲まれるのは嬉しいものだった。

「今回大活躍じゃん。」

「運が良かっただけだよ。」

「いやー、だってビックメゾンのファーストルック2個なんて日本人としてかなりのものだよ？」

「そうそう。テレビでも紹介されてたんだから。」

「なんでインタビュー受けなかったの？現地で。」

「コレクションに一杯一杯で……それにエージェントがオーディションと挨拶回りを優先させてたから。」

「ま、うちらは本人から直接聞けるからいいんだけどね（笑）」

ひとしきり質問の嵐が済むと皆はそれぞれに互いの近況を話し始める。

結子と社長と母親の策略により、初めてNYコレクションに挑戦してから3回目のコレクションシーズンで、ついに憧れのパリコレにも挑戦することが出来た。

なんとか先シーズンからの流れでファーストルックを2個とることができ、挑戦結果としてはまあまあだったのではないかと思う。

「ほんと始めの頃『別に生活できる分稼げたらいい。』とか言ってた人とは思えないよね！」

「ほんとだよー。なんて天邪鬼なんだって思ってたんだから（笑）」

思えばモデルを始めたころにはこんな未来になるなんて全く持って思っていなかった。

元はといえば、アルバイトをしていた頃なんて来年もまともに生活出来ているかさえ不安で、毎日ちゃんにご飯を食べて普通に暮らせるのが夢だったように思う。

そもそも大学に進むのを諦めて就職を選んだのに、結局アルバイトしか出来ず、本当に惨めな気持ちで働いていた私にとっては、モデルの仕事というだけでもあまりにも眩しいものだった。

随分と逸れちゃったなあ、昔の予想と。

一回は諦めてしまった。

それでも夢みていたら未来は変わる。

自分の夢の話なんて言うだけ恥ずかしいって思ってたけど、飛び込んでみたら、行動に移してみたら、なんだかいつの間にやら現実になってしまった。

「ほんと皆がいなかったら実現してなかったと思う。夢を叶えさせてくれて、ありがとう。」

扉はもう一度あく

<http://p.booklog.jp/book/56997>

著者：大河内 葵

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/nshkn/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/56997>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/56997>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ